

# 「織田信長 ～歴史の転換者」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

【※このレジュメは、講演当時（平成22年10月）から大幅に加筆修正して、より充実した分かりやすい内容となっております。どうぞお楽しみください】

## 1. 「生きた情報」を重視した信長の姿勢

日本人のあいだで、織田信長(おだのぶなが)という名前を聞いて「知らない」という人はまずいないでしょう。戦国時代で最も有名な人物のひとりであり、天下統一を目前にしながら、家臣の明智光秀(あけちみつひで)が起こした本能寺の変によって自害に追い込まれるというドラマ性も相まって、これまでに小説やエッセイなどによる文章化、あるいは映画やテレビなどの映像化が数えきれないほど行われています。

そんな信長には、いくつかの「顔」が存在しているといわれています。羽柴秀吉(はしばひでよし、後の豊臣秀吉=とよみひでよし)や柴田勝家(しばたかついえ)など、多数の有能な家臣を従えて天下統一を目指したという「武将」としての顔のほか、楽市楽座や南蛮貿易によって経済力を高めた「政治家」としての顔、そして、数多くの人間を無慈悲にも殺害したとされる「虐殺者」としての顔などです。

しかし、信長の数多くのエピソードがそれぞれ部分的に紹介されることはあっても、彼が目指そうとしていたことや、あるいは彼の死後にも引き継がれていったことなど、信長の全体像については意外と知られていないのではないのでしょうか。

今回の講座では、「歴史の転換者」の名にふさわしい信長の行動や、現代の歴史の流れにもつながる彼の功績について、側面的な立場から紹介すると同時に、彼の生涯から私たちが学ぶべき「教訓」についても探っていきたいと思います。

信長が若い頃に「うつけ者」と呼ばれていたことは有名ですね。城主でありながら、派手な着物に身を包んで領地を馬で駆け巡り、領民と身分を考慮することなく対等に付き合い、また父である織田信秀(おだのぶひで)が急死した際には、位牌に向かって抹香をわしづかみにして投げつけたことなどがよく知られています。

こうした行為に対して眉をひそめる人々が多いのも事実ですが、時は戦国時代であり、食うか食われるかの厳しい毎日であったことを考えれば、信長の行動にもそれなりの理由があったと考えるべきでしょう。

城主といってもまだ若く、行動力もある信長にとっては、それこそ「自分で領内の様子を確認する」必要があり、その際に形式ばった衣装では、領民の本音を聞くことができないという考えから、あのような行動をとったとも思われます。要するに信長は、領地や領民を守るためには「生きた情報」を得ることが何よりも重要であることを、若いうちから肌で感じていたのではないのでしょうか。

こうした信長の「情報を重視する」姿勢は、後の彼の生涯に何度も襲いかかる危機に対しても、大いに役立つことになるのです。

さて、信長の出身である織田家は、もともと尾張(現在の愛知県西部)の守護大名であった斯波氏(しばし)の代理人である守護代の家臣という身分でしたが、父である織田信秀の頃には独立し、尾張の中で大きな勢力を持つようになりました。

信秀の急死後、若くして家督を継いだ信長は、身内を含めた争いに勝ち抜いて、1559年には尾張一国を統一するまでに成長しましたが、そんな彼に大きな試練が、不気味な足音とともに東の方角からやって来たのでした。

駿河(現在の静岡県東部)を本拠地とする戦国大名の今川義元(いまがわよしもと)が、1560年に尾張を狙って侵攻してきたのです。25,000人ともいわれる今川氏の軍勢に対して、信長が動員できる人数はそのわずか10分の1以下の2,000人程度でした。まともに戦っては勝ち目がありません。

家臣からは籠城を勧める意見もありましたが、信長は動きませんでした。しかしその後、今川軍の攻撃開始を聞くと信長はすぐさま出陣し、熱田神宮で戦勝祈願を行いました。

実は、信長は家臣からもたらされる「ある情報」を待っていたのです。そして、その情報こそが、圧倒的に不利と思われた情勢を一気に逆転できる、唯一の手段でもありました。

やがて、信長に待望の「情報」がもたらされました。義元が窪地(くぼち)で身動きの取りにくい桶狭間(おけはざま)を行軍中だということです。これを好機と見た信長は、ほぼ全軍を桶狭間に向かって突撃させました。折からの豪雨で視界の悪かった今川軍は、信長の奇襲に大あわてとなり、体勢を立て直すことができないまま、義元が信長の家臣に倒され、首を取られてしまいました。

後の世で「桶狭間の戦い」と呼ばれたこの戦は、信長による大逆転の勝利だったわけですが、戦後の論功行賞が、それまでの慣例とは明らかに異なっていたことをご存知でしょうか。

義元的首を実際に打ち取った家臣よりも、義元が桶狭間を行軍中であるという情報を知らせた家臣の方が一番手柄であるとして、より多くの褒美を与えられているのです。その背景には、刀や槍による手柄よりも、情報戦を制することが戦勝につながるという、信長の考えがありました。

さて、義元の死によって、今川氏は急速に勢力が弱まっていったのですが、ここで信長は通常の戦国大名とは全く異なる路線を歩むことになります。

なぜ信長はそのような行動をとったのでしょうか。この「なぜ」を理解することによって、私たちは信長の生涯をかけた「大きな目標」を目の当たりにすることができるのです。

## 2. 「長期的なビジョン」で行った様々な改革

義元の死によって今川氏は没落しました。ということは、勢力が衰えた今川氏の領地を奪い取ることは、比較的容易だったのです。

当時の今川氏は三河(現在の愛知県東部)から遠江(現在の静岡県西部)、さらには駿河と広大な領地を持っていたのみならず、これらの地域は気候が温暖で収穫も多く、海の幸にも恵まれ、さらには金山もあるという、経済力豊かな「おいしい」場所でもありました。

通常、戦国大名であれば、何も考えることなくこれらの領地を狙うことでしょう。しかし、実際には信長は「おいしい」領地には目もくれず、徳川家康(とくがわいえやす)と同盟を結び、家康に今川氏の領地侵攻を任せたいうえで、自らは美濃(現在の岐阜県南部)の攻略を目指しているのです。

なぜ信長はこのような手段を選んだのでしょうか。実は、この選択こそが、信長が描いていた「天下統一へ向けての明確なビジョン」だったのです。

ここで信長になったつもりで今後の対策を考えてみましょう。「宝の山」ともいえる今川氏の領地は確かに欲しいですが、仮に自身が三河・遠江・駿河の三国の領有に成功したとしても、武田信玄(たけだしんげん)や北条氏康(ほつじょうじやす)といった、強力な戦国大名と領地が接してしまふこととなります。

ということは、今後は信玄や北条氏から自己の領地を守るために、常に大軍を彼らとの隣接地に置かねばならないこととなりますから、そんな「防衛するのが精一杯」の情勢において、天下統一を目指して上洛(じょうらく、京へ向かうこと)を目指すようなことが果たして可能でしょうか。

こうしたことが頭にあったゆえに、信長は奪えるかもしれない今川氏の領土をあっさりと捨てて、家康に三河の攻略を勧めるという、いわば三河を「クッション」として、自領の尾張を「安全地帯」にしたうえで、後顧の憂いをなくして美濃を攻め取り、上洛への道を確保しようと考えたのです。

天下統一のためには目先の利益にこだわらず、常に長期的なビジョンを持つという信長の一貫した姿勢が、今後の彼の人生やその方針を大きく変えたのでした。

さて、信長は苦勞の末、1567年に美濃を攻め落とすことに成功しましたが、その後は自身の印判に「天下布武(てんかふぶ)」と記すようになりました。天下布武とは「天下に武を布(し)く」、すなわち「武力によって天下を支配する」という意味が込められており、自分の最終目的が天下統一であることを高らかに宣言したのです。

さらに、美濃の稲葉山城に入った信長は、城付近の地名であった「井ノ口(いのくち)」を「岐阜」と

改めました（城の名前も岐阜城としています）。なお、岐阜については、名君として知られた古代中国の周の文王が、岐山(きさん)より興ったというエピソードが由来であるとされています。

新たな征服者によって地名が変わるということは、世界の権力者にはよくあることでした。例えば、古代のアレクサンドロス大王が征服した地は「アレクサンドリア」と呼ばれ、現代でもエジプトの都市として残っています。

しかし、我が国では、日本武尊(やまとたけるのみこと)が草薙(くさなぎ)の剣でなぎ倒した草を積んで火を放ち、敵を火攻めにしたことについた「草薙」や「焼津(やいづ)」のように、過去の伝承から地名が付いたり、あるいは足利氏(あしかがし)や新田氏(にったし)のように、地名を自分の苗字にしたりすることはあっても、時代の権力者によって地名が変わるということは、これまでに例がありませんでした。

その背景には、信長による「天下統一へ向けて世の中を新しくする」という強い意思表示がありました。ちなみに、信長以降は我が国で権力者が地名を変更することが当たり前となり、例えば、信長の家臣であった羽柴秀吉は、近江(現在の滋賀県)の今浜の地を信長から与えられた際に、信長の名にあやかって「長浜」に改めています。

また、美濃を我が領地とした信長は、それまでの尾張から岐阜城を自らの本拠地に定めましたが、彼のように「本拠地を変える」ということは、他の戦国大名にはそう簡単にはできないことでした。なぜなら、この頃の戦国大名の兵力は、大半が農民兵だったからです。

地元の農民にとって唯一ともいえる財産は、彼らが所有する田畑でした。農民は田植えや稲刈りなどのいわゆる農繁期には、当然田畑に釘付けになりますよね。

ということは、仮に戦国大名自身の領地が広がったとしても、まさか農民の田畑を動かすわけにはいきませんから、農民自身もそう簡単に移動させることができなかったのです。しかし、信長にはそれが可能でした。なぜでしょうか。

実は、信長の兵力はいわゆる兵農分離された、戦争専門の傭兵(ようへい)が中心だったのです。傭兵は、命がけで最後まで戦う農民兵とは違って、形勢が不利と判断すれば逃亡することも多かったことで、兵力そのものは弱かったのですが、それを補って余りある、一年中戦えるという強みを持っていました。

加えて、傭兵は農民兵のように田畑を持っていないことから移動の自由があり、それゆえに戦国大名が本拠地を移しやすいという長所も持っていたのです。

さて、信長は兵農分離の長所を最大限に利用して岐阜に本拠地を移動すると、それまでの戦国大名と同じように、家臣たちを城下に住まわせることで人や物資の流れをつくるという、いわゆる城下町の建設に乗り出しましたが、信長のやり方は実に徹底していました。

信長は、岐阜城周辺の土地を区割りして、家臣から足輕に至るまでに、半ば強制的に移住させたのです。数千から1万と考えられる動員兵力のすべてが仮に移住したとすれば、その家族を含めて、少なくとも数万の人口が集中することになりますから、あっという間に岐阜は我が国有数の都市となりました。

人口が多ければ、衣食住において商売が常に成り立ちますから、常設の店舗もすぐに定着しますし、信長は楽市・楽座の政策を行っていますから、多額の税を払う必要もありません。さらに、家臣が城下に定住しているということは、領民の安全が保障されるだけでなく、敵が攻めてきた場合にもすぐに戦えるという防衛上のメリットもありますから、まさに良いことづくめと言えますね。

岐阜を新たな城下町として繁栄させることに成功した信長は、大きな目標である天下統一への次の一手として、西の方角へその眼差しを向けていました。

### 3. 打ち破った「信長包囲網」

信長が美濃の攻略を目指していた頃には、室町幕府の権威はさらに低下しており、将軍の足利義輝(あしかがよしてる)が、1565年に松永久秀(まつながひさひで)らによって暗殺されてしまいました。

次の将軍職を目指していた義輝の弟の足利義昭(あしかがよしあき)は、それまで匿(かくま)われていた越前(現在の福井県北東部)の朝倉義景(あさくらよしかげ)から離れ、義景の家臣であった明智光秀の仲介で信長を頼りました。

それまでに北近江の浅井長政(あざいながまさ)と同盟を結び、妹のお市を長政の妻としていた信長は、この好機に早速上洛を決意しました。

信長は上洛の途中で南近江の六角氏(ろっかくし)を破ると、1568年に無事に京へとたどり着き、義昭を将軍へと就任させました。名ばかりではあっても、武家の棟梁である室町幕府の将軍を誕生させ、また京に入ったことで朝廷を保護する立場となった信長は、天下統一に向けて大きく前進することになったのです。

義昭は、自らの将軍就任の最大の功労者である信長に深く感謝し、管領もしくは副将軍になるよう勧めましたが、信長はいずれも辞退し、代わりに堺を含む和泉(現在の大阪府南西部)の支配を認めさせました。一見すると、いわゆる「名よりも実を取った」と思われる信長の行為でしたが、その裏にはしたたかな計算がありました。

ここで信長の立場で考えてみましょう。管領や副将軍を引き受けるということは、信長が室町幕府の組織の一員に、もっといえば義昭の家来になるということを意味します。信長の最終的な目標は、自身による天下統一ですから、いずれは義昭を見限るつもりでしたし、現実にもそうになりました。しかし、その際にも彼が管領や副将軍であったとすれば、主君に対する裏切りという重罪を犯してしまうこととなります。

いくら戦国の世とはいえ、主(あるじ)に対する謀反(むほん)というのはダメージが大きく、後の天下取りにも影響を及ぼすのは避けられません。だからこそ、信長は義昭の誘いを断り、その代わりに我が国最大の貿易港の一つであった堺をおさえるために、和泉の支配を義昭に認めさせたのでした。堺を我が手にしたことによって、信長はこの後、貿易などの経済面において、他の戦国大名よりも大きく優位に立つこととなります。

さて、義昭が将軍になったばかりの頃の二人の関係は良好でしたが、信長は次第に義昭を圧迫するようになっていきました。やがて信長の本意を悟った義昭は激怒して、信長を倒すべく様々な作戦を練り始めました。

後の世に「信長包囲網」と名付けられた、信長にとって人生最大のピンチが訪れようとしていました。

堺に対する支配権を手に入れて経済力をさらに高めた信長は、次なる領地の目標を越前の朝倉義景と定め、1570年の旧暦4月に京を出陣し、敦賀の金ヶ崎城(かねがさきじょう)を落とすなど、緒戦で勝利を収めました。

ところが、まさに好事魔多し。信長の義理の弟であり、最も信頼を寄せていた武将の一人であった浅井長政が、信長を裏切って北近江から攻め寄せるという、驚くべき情報をもたらされたのです。

予想もしなかった事態に、さすがの信長も気が動転しました。越前と北近江から挟み撃ちにあってしまえば、いくら信長でも勝てるわけがありません。しかもその危機は確実に訪れようとしており、もう時間が残されていませんでした。

覚悟を決めた信長は、こう宣言しました。

「ワシは逃げる」。信長の決死の逃避行が始まりました。

信長はわずかな手勢とともに金ヶ崎を脱出すると、駆けに駆け一目散に京を目指しました。こうして朝倉氏と浅井氏による包囲網から辛くも逃れた信長は、数日のうちに京に戻ることができましたが、その供はわずか10人ばかりであったと伝えられています。

後の世に「金ヶ崎の戦い」と呼ばれた、負け戦の屈辱を味わった信長は、浅井・朝倉の両氏を深く恨むようになりました。やがて信長は同盟相手の徳川家康とともに、同年6月に姉川の戦いで浅井・朝倉の連合軍を破りましたが、両氏に止めをさすことはできませんでした。

息を吹き返した浅井・朝倉の軍勢は京を目指しましたが、信長に阻まれると比叡山に立てこもって反撃の機会を待ちました。浅井・朝倉軍を匿(かくま)ったということは、比叡山の延暦寺が信長を敵とみなしたことを意味しており、信長はここでも衝撃を受けました。

さらに信長を悩ませたのが、いわゆる三好三人衆といわれた三好氏の勢力が摂津(ここでは現在の大阪市

付近のことで挙兵すると、本願寺が三人衆に味方したという事実でした。つまり、信長は戦国大名の他に、延暦寺や本願寺といった、強大な宗教勢力をも敵に回して戦わなければならなくなったのです。

それにしても、なぜ信長は宗教勢力から「仏敵」とみなされたのでしょうか。実は、その理由には大きな「権益」がありました。

岐阜がそうであったように、信長は大胆な発想で城下町を建設していきましたが、その際に、当時の常識であった通行税を徴収するための関所や、商売をするために必要な組合、すなわち座を設けませんでした。いわゆる「楽市楽座」の制度を採用したのです。

楽市楽座によって商売の自由が認められた信長の支配地では、多くの人口を頼りに各地の商人がこぞって集まり、大変なにぎわいを見せました。その結果、信長の領内は他の大名や宗教勢力などのそれに比べて、低い税率であっても自然と収入が増加していったのです。

しかし、信長によるこれらの斬新な政策は、それまでの関所や座による莫大な収入を「権益」として頼りにしていた宗教勢力などにとっては、目障りな商売敵でしかありませんでした。

一方の信長からしてみれば、宗教勢力は本来の布教活動の精神を忘れ、自分の都合だけで、庶民の迷惑を顧みずに権益にしがみついているようにしか見えなかったのです。自己の武力を背景に勢力を拡大した信長は、やがて宗教勢力に対して、権益の放棄と武装解除を、信長軍による防衛を条件に迫りましたが、それこそ「眠っていても儲かる」権益を宗教勢力がそう簡単に手放すはずがありませんでした。

信長と宗教勢力との衝突は、いわば時間の問題であり、そして信長にとって最悪のタイミングで起きてしまったのです。

浅井・朝倉軍は比叡山に登ったまま動こうとはしませんでした。もし信長が京から離れればすぐにでも占領できる距離にいたために、信長自身も京から動くことができませんでした。

こうして信長が京に釘付けになっている間に、本願寺が率いる伊勢長島(現在の三重県桑名市付近)の一向一揆の動きが活発になり、伊勢の長島城や尾張の小木江城(きえじょう)を次々と落としました。

特に尾張の小木江城は、信長の弟が守っていたのですが、最後には自害に追い込まれてしまいました。京を動けぬ信長は、可愛い弟が一向一揆によって滅ぼされていくのを、指をくわえて見ていることしかできなかったのです。

宗教勢力によるこれらの無情な仕打ちに対して、信長は内心で怒り狂いながらも、じっと耐え続けました。そうこうしているうちに 1570 年も年末になると、朝廷と足利義昭によって和睦が成立して、信長はやっとの思いで岐阜に戻ることができました。

講和が成立した背景には、兵農分離していない朝倉軍の都合もありました。雪深い越前は真冬になると身動きが取れなくなるので、来春の農作業を確実に行わせるためにも帰国を急いでいたからです。こんなところにも信長との差がありました。

年が明けて 1571 年、信長は近江の姉川を封鎖して佐和山城(さわやまじょう)を落とし、南近江の支配権を確立するとともに、朝倉氏や浅井氏、あるいは本願寺などの連絡網を断つことに成功しました。

包囲網が連携(れんけい)することを防いだ信長は、1571 年旧暦 9 月 12 日に、信長に抵抗を続けた比叡山の焼き討ちを敢行しました。長い歴史を誇った延暦寺は業火に焼かれ、逃げまどう多くの僧侶のみならず、女人禁制のはずなのになぜか存在した女性や、あるいは子供までもが容赦なく首をはねられました。

比叡山の延暦寺は信長に敵対する宗教勢力としては滅亡しましたが、一向一揆の軍勢は相変わらず信長を苦しめ続けました。そして 1572 年になると、信長が最も恐れていた甲斐(現在の山梨県)の武田信玄が将軍義昭の誘いに応じ、上洛を目指して動き始めました。

信玄は三方ヶ原の戦いで徳川家康と信長の連合軍を苦も無く蹴散らすと、不気味な足音とともに京を目指して進軍を続けました。信玄に京へ攻められては、信長とて勝ち目はありません。信長の運命はまさしく風前の灯となったはずでした。

しかし、天は信長に味方しました。上洛の途中で信玄は病に倒れ、ついに帰らぬ人となってしまったのです。

信玄が挙兵し、三方ヶ原の戦いで家康を破ったことを知った義昭は喜び、信玄の動きを警戒して岐阜に戻っていた信長の隙(すき)をついて、居住していた将軍御所の周囲に堀をめぐらせて防備を固めたうえで、信長に対して挙兵しました。

しかし、信玄が亡くなったことで義昭の野望は夢と終わり、信長に攻められて降伏せざるを得ませんでした。義昭はこの後もう一度挙兵しますが再び敗れ、1573 年旧暦 7 月に、義昭は信長によって京を追われ、240 年近く続いた室町幕府は滅亡しました。

義昭を追放した信長は、返す刀で朝倉義景や浅井長政を次々と滅ぼし、越前から北近江にかけて領地を拡大することに成功すると、翌 1574 年には伊勢長島の一向一揆を、女性や子供に至るまで皆殺しにして、さらに 1575 年には越前の一方向一揆も滅ぼしました。

信長の一方向一揆に対する酷い仕打ちは、いかに弟や家臣たちの復讐のためとはいえ、比叡山延暦寺の焼き討ちとともに、その残虐性が問題視されることが多いですが、いずれも先に手を出したのは宗教勢力の方であり、また一向一揆は女性や子供までもが武器を持って戦っていたという現実を考えれば、信長の行為はやむを得ないと判断すべきかもしれません。

信玄の死後、家督を継いだ子の武田勝頼(たけだかつより)は攻勢に出て、東美濃や遠江に入って信長や

家康の城を次々と落としました。しかし、1575年に三河の長篠まで進出した際に、信長・家康が用意した多数の鉄砲隊の前に、武田軍が率いた騎馬隊が壊滅的な打撃を受けました。

これが有名な長篠合戦です。この戦いで多くの精鋭を失った武田家は没落の一途をたどり、1582年旧暦3月に信長によって滅ぼされてしまいました。

#### 4. 「政教分離」の実現と自らを「神」とした信長

武田家を破った信長は、1576年から近江の安土(あづち)に五層七重の壮大な安土城を築き始めました。1579年に城が完成すると、信長はそれまでの居城であった岐阜城を長男の織田信忠(おだのぶただ)に譲って、自らは安土城へと移動しました。

ところで、新たにつくられた安土城は、それまでの築城の常識を大きく変えるものでもありました。なぜなら、山城(やまじろ)と呼ばれた従来の城は、敵に攻められにくいように山の頂上に建てるのが普通だったからです。しかし、安土城はそれほど高くない山に建てられていました。これを平山城(ひらやまじろ)といいます。

なぜこの時期に城の建築方法が大きく変化したのでしょうか。

山城から平山城へと城の建築方法が変わった大きな原因は、鉄砲の出現でした。いかに堅固な山城であっても、鉄砲の射程距離の範囲内であれば、結局は攻撃を受けてしまいます。

一方、平山城であれば城の周囲に大きな堀を設けたり、あるいは城自身を高く設計したりすることで、射程距離にかからないようにすることが可能になりますし、さらに城に立てこもれば、内部へと迫ってくる敵を鉄砲で狙い撃ちすることもできます。

しかも、山城に比べて交通の便が良い平山城であれば、城下町をさらに大きく広げることができて、経済はますます活性化します。そして、経済が発達して収入を増やすことができれば、さらに大きくて頑丈な城を建てることのできたのです。

ところで、宗教勢力との宿命的な対決を経験した信長にとって、信仰の道から外れて權益にしがみつくことの多かった仏教が嫌悪の対象でしかなかった一方で、西洋の進んだ文化や技術をもたらしたキリスト教(=カトリック)を保護しました。

ちなみに、カトリックの宣教師から地球が丸いことを知らされた信長は、すぐにそれを理解したそうです。16世紀の日本人とはとても思えない、信長の柔軟な発想力がうかがえるエピソードですね。

さて、比叡山は焼き討ちで抑えたものの、一向一揆と信長との戦いはなかなか決着がつきませんでした。総本山といえる大坂の石山本願寺が、城並みの防御力を誇っていたばかりでなく、毛利氏(もうり)が、村上水軍を活用して海路で兵糧や武器弾薬を運び続けていたからでした。

信長は石山本願寺への輸送を断つため、1576年に村上水軍と戦いましたが、相手の強力な火器によって、信長軍の船は次々に炎上し、惨敗してしまいました。このままではいつまで経っても石山本願寺を落とすことができません。どうすれば村上水軍に勝てるのでしょうか。

ここでも信長は、その天才ぶりを遺憾なく発揮するのです。

信長軍が村上水軍に敗れたのは、敵の火器で自軍の船が燃やされたからでした。だとすれば、燃えない船をつくることができれば勝てるはずです。船を燃やされないようにするには頑丈な鉄を使えばよいのですが、鉄は重たくて沈んでしまいます。

通常の間人ならばここで諦めるところですが、信長の柔軟な頭脳は、とてつもない発想を思いつきました。

「鉄でできた船は重くて沈むが、木で船をつくり、その周囲に薄い鉄を巻けば沈まないのではないか」。

こうして完成した鉄甲船(てっこうせん)は、1578年に村上水軍を散々に打ち破り、信長は大坂湾の制海権を握ることに成功しました。逆に毛利氏からの補給路を断たれた石山本願寺は徐々に追いつめられ、1580年についに信長に降伏しました。

さて、およそ10年にわたって戦いを続け、そのために肉親や多くの家臣を失うことになった本願寺に対して、信長はどのような態度をとったと思われるのでしょうか。

石山本願寺から退去し、以後は信長に逆らわないことが条件ではあったものの、何と今後の布教は自由としているのです。

信長に対して反逆さえしなければ、たとえ激しく戦った相手であっても信教の自由を認める。ここから導き出される結論は、信長はいわゆる宗教弾圧をしていない、ということです。

確かに、比叡山延暦寺を焼き討ちした後でも、信長は天台宗の禁教令を出していません。後に豊臣秀吉や徳川家康によってキリスト教(=カトリック)が禁教とされ、宣教師や信者たちが激しい弾圧を受けたことと比べれば対照的です。

ところで、信長が現代の私たちに意外な「贈り物」をしていることを皆さんはご存知でしょうか。

巨大な圧力団体と化していた宗教勢力は、信長によって徹底的に滅ぼされましたが、実はこのことがきっかけになって、以後の我が国では、宗教団体が政治に積極的にかかわることがなくなりました。例えば、他国で悩まされることが多い原理主義者による自爆テロリストも、我が国では原則として起きていませんよね。

日本国憲法でも第20条で明確に規定されている「政教分離」は、信長がその道筋をつけてくれて

いるという事実を、私たちはもっと理解すべきではないでしょうか。

さて、宗教勢力や室町幕府など、旧来の勢力を打ち破って天下統一へと着実に進んでいった信長でしたが、元々は尾張の守護代の家老の一族に過ぎなかった彼にとっては、自己の「権威の後ろ盾」がどうしても不足してしまうという宿命的な問題が浮上していました。

後に同じような悩みを抱えることになった豊臣秀吉や徳川家康は、関白や征夷大將軍となることで、天皇あるいは朝廷の後ろ盾を利用しましたが、信長は既存の権威におもねることなく、破天荒(はてんこう、誰もが成し得なかったことをすること。「豪快で大胆な様子」という意味は間違いです)なことを思いつきました。

それは、自分自身が「神」となって、人々に信仰の対象とさせることで、既存の権威を打ち破ろうとしたことです。それまでの我が国では、菅原道真(すがわらのみちざね)のように、死後に神として祀(まつ)られることはあっても、生前に「自らを神として祀れ」と宣言した人物は存在しませんでした。

「信長＝神」という図式は、初めてお聞きの皆様には耳を疑う話かもしれませんが、実は間接的な証拠があります。それこそが先述した安土城であり、この城は前代未聞の構造で建てられていました。

安土城は後述する本能寺の変の影響で消失しましたが、その後の発掘調査や復元図などで、その全容が次第に明らかになってきています。

安土城の天守閣は、他の城とは違って「天主」と呼ばれていました。これは当時のキリスト教の別名であった「天主教」にもつながり、天主に存在する信長は神の生まれ変わりであると考えられることができます。

また、信長が完成した安土城に入城するのは1579年の旧暦5月11日ですが、この日は信長の誕生日であると考えられており(12日説もあります)、誕生日を祝して入城するという姿勢は、イエス＝キリスト生誕の日であるクリスマス(12月25日)を祝う習慣にもつながっています。

さらに、安土城の上層には釈迦如来(しゃかにょらい)の図が描かれていたと伝えられており、その上の「天主」に存在する信長こそが、あらゆる仏や神を超えるものとして信仰の対象にしたとも考えられているのです。

「信長が自己を神として祀るように宣言した」という間接的な証拠は、実はもう一つあります。それは徳川家康の死後の扱い方です。

皆さんは、家康が現在どこで眠っているかご存知でしょうか。もちろん栃木県日光市にある日光東照宮ですね。東照宮において、家康は東照大権現(とうしょうだいごんげん)として祀られているのですが、これは、家康が死の直前に「自分を日光に権現として祀るように」と遺言したのがそもそもの由来です。

つまり、東照大権現として祀られるのは家康自身の意思によるものなのです。しかも、権現とは神の化身(けしん、仮の姿という意味)という意味ですから、まさに家康を現人神(あらひとがみ)、すなわち「生き神様」として祀っていることとなります。

信長が「自分を神として祀る」ことは確かに破天荒なことでしたが、これがきっかけとなって、家康が同じように「権現様」と祀られても何の違和感もなかったことが、信長の考えが結果として人々に受け入れられた間接的な証拠とはならないでしょうか。

ところで、既存の権威を超えるために「自らが神になる」と宣言した信長でしたが、絶対的な権力を持つ為政者が、自らを神格化することは、同時に「自分が正しいと思うことは何でも正しい」という、独裁的で危険な思想を持つことにもつながっていました。

そして、その考えの末に待っていたのが本能寺の変だったのです。

## 5. 「独裁者の罠」にはまった本能寺の変

若い頃の信長は、実は「非常に甘い」武将でもありました。なぜなら、何度も裏切ろうとした実弟の織田信行(おだのぶゆき)を殺害したことを除いては、一時は信長に逆らった武将であっても助命しているからです。例えば、信行側についた柴田勝家らも許していますし、美濃の斎藤氏を滅ぼした際も、当主の斎藤龍興(さいとうたつおき)は追放されただけでした。

しかし、妹の婿であり、絶対的な信頼を寄せていたはずの浅井長政の裏切りにあってからは、信長の人格が大きく変化していったと考えられるのです。例えば、浅井長政を滅ぼした後に、父の浅井久政(あざいひさまさ)や朝倉義景とともに、そのドクロを漆塗(うるしぬ)りにして金粉をまぶした薄濃(はくだみ)にして、それらを肴(さかな)に酒を飲んだ、という記録が残っています。

先述の比叡山延暦寺の焼き討ちや一向一揆に対する皆殺しも、結果的には仕方がなかったとはいえ、信長の「敵に対しては容赦なく牙(きば)をむく」考えの延長線上にあったことは否定できないでしょう。

こうした信長の姿勢は、自らを神とただけでなく、天下統一が近づいて、自分に正面切って敵対する人間が少なくなった 1570 年代の後半からより顕著に、そしてよりエスカレートしていきました。古今東西の絶対的な権力者の誰しもが陥(おちい)りがちな「独裁者の罠」に、信長もはまってしまったのです。

例えば 1580 年、信長は古来の重臣であった佐久間信盛(さくまのぶもり)や林通勝(はやしみちかつ)を、過去の不行跡を理由に突然追放しており、1582 年の旧暦 4 月には、自分が安土城を留守にしている間に、無断で外出した侍女たちを残らず殺害するという事件も起こしています。

信長による、こうした狂気じみた行動に対して、家臣たちは「明日は我が身か」とおびえるとともに、信長の手法についていけないという考えを持つようになりましたが、その中のひとりに、信長

によって見出され、過去に例のない出世を果たした武将がいました。

彼こそが、我が国の歴史を大きく塗り替えることとなる大事件を起こした明智光秀だったのです。

皇室など、我が国古来の権威や秩序を重視していたとされる光秀にとって、自らが神となる信長の姿勢や、その独善的な態度は、自分がそれまでに信長から受けてきた大きな恩を差し引いても許されるものではなく、心の中で次第に反感が高まっていました。

そんな折に、信長が子の織田信孝(おだのぶたか)に、四国の長宗我部元親(ちょうそかべもとちか)を滅ぼすべく出陣させようとしたのですが、これは光秀にとっては絶対に許されないことでした。なぜなら、信長は元親と当初は同盟を結んでいたのですが、その仲を取り持ったのが光秀自身だったからです。

しかも、光秀の家臣の義理の妹が元親に嫁いでおり、その間に跡継ぎの信親(のぶちか)が生まれていました。それなのに、嗚呼それなのに、信長は自分のこれまでの苦勞を水の泡にするだけでなく、家臣の縁者を見殺しにしようとしているのです。

絶望した光秀の、心の中に秘めていた爆弾がついに炸裂(さくれつ)しました。秀吉の毛利攻めに協力すべく、領地の丹波(現在の京都府中部など)を出発した光秀の軍勢は、京が近づくと突然進行方向を変え、光秀が高らかに宣言しました。

## 「敵は本能寺にあり！」

わずかな手勢で京の本能寺に宿泊していた信長は、突然の光秀の謀反になすすべもなく、業火の中で49歳の波乱に満ちた生涯を閉じました。時に1582年旧暦6月1日の深夜でした。この大事件は「本能寺の変」と呼ばれ、我が国の歴史を大きく変えた出来事として知られています。

応仁の乱から100年以上続いていた戦国時代は、織田信長という一人の武将の出現で大きく変化しました。彼が持っていた独創的なアイディアは、旧来の慣習に振り回され、あるいは泣かされた人々にとっては喜ばしく思いましたが、それは同時に、それまでの権益にしがみついていた勢力との全面戦争を意味していました。

食うか食われるかの厳しい世の中では、逆らってくる者に対して皆殺しなどの容赦ない攻撃を加えることは、ある意味仕方がないことでした。

しかし、武力で相手を屈服させたり、大胆な政策で庶民の支持を集めたりすることはできても、皇室や朝廷などの旧来の権威を超えることは容易ではありませんでした。

考え抜いた信長は、自らを神として祀る環境をつくって従来の権威を超えようとしたのですが、それは同時に独裁者にありがちな「自分がシロと口にすれば、どんなものでもシロになる」という危険な思想をも伴っていました。そして、こうした矛盾が大きな形で爆発したのが、光秀による本能寺

の変だったのです。

もし本能寺の変が起こらなかつたら、信長は我が国をどう導いていったのでしょうか。すべての謎を一気に消し去った光秀の天下は、わずか 10 日余りで姿を消し、やがて時代は秀吉から家康へと移っていましたが、信長の「時代の変革者」としての完成した姿を想像することは、現代の私たちにとっても興味深い歴史ロマンと言えるでしょう。（完）

主要参考文献：「逆説の日本史 10 戦国霸王編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）

<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379660>

YouTube 再生リスト「織田信長」

[https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML6vBswR6klAqMQOqqmQ\\_8dr](https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML6vBswR6klAqMQOqqmQ_8dr)

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>